

## 令和4年度 2023年2～3月海外語学研修 (ロシア語・カザフ語)

### (カザフスタン共和国アルファラビ・カザフ国立大学) 研修報告書

理工学群工学システム学類1年(研修参加時)

松田 直也

#### はじめに

この研修に参加してほんとによかったと思っている。日本には体感できないことをたくさん学んだ。たくさんのすごい人、面白い人に出会った。たくさんの美しいもの、美しい風景をみた。研修終盤になっても思うことは、一日の時間がゆっくり感じるのだ。つまり時の流れが日本にいるときよりも遅く感じるということ。日本には感じるができない、ときめきや驚き、興奮がそうさせていると思う。

また、このような素晴らしい機会を提供してくださった白山先生、研修前から研修中にかけて様々な調整をしてくださった江下さん、現地でのコーディネートをしてくださった二ノ宮先生、サマル先生には大変感謝しております。

ロシア語は大学に入ってから学び始めた。第2外国語を選べると聞き、入学前から第2外国語としてロシア語を学ぼうと思っていたので迷わず選んだ。ロシア語を学ぼうと思ったきっかけは、将来宇宙開発に関わる仕事に携わりたいと思ったからだ。そんな動機で始めたロシア語だったが、学んでみると面白い言語で、結局必修ではないにもかかわらず1年間学び続けた。カザフスタン研修があると聞き、せっかく1年間学んできたし、このチャンスを逃したら一生カザフスタンにはいかないなと思ったので迷わずに応募した。カザフスタンについて何も知らない状態で来てしまったため、この地で知ったこと、わかったこと、感じたことがたくさんあった。

#### 1. 言語について

今回の研修のメインはロシア語、それに付随してカザフ語とCiCでの英語というプログラムだった。研修全体を通して自分のロシア語のレベルの低さをことごとく痛感した。プログラムの応募条件にロシア語ができなくてもいいと書いてあったので、まあロシア語ができなくても何とかなるだろうと思っていたが、思った以上にロシア語ができなかった。

まず、初日にホームステイ先についたが、ホストファミリーと全くロシア語で会話できなかった。しかし、ホストファミリーの中に日本語を学ぶ同い年のカザフ人学生がいたので、彼とはロシア語、日本語で何とか会話できたが、他の家族とは全く会話ができなかった。また、準備学部での授業も全くついていけなかった。クラス分けがされずにN2レベルのクラスに入ってしまった。ロシア語でロシア語を学ぶのは本当に大変だった。もともとそのクラスにいたほかの留学生にもとても迷惑をかけてしまったと思う。それでもロシア語の先生は根気強くロシア語を教えてくれた。一か月授業を受けたことで、最終的には先生が言っていることの5割くらいはわかるようになった。それでも街中で話しかけられたりするときは、全くわからない。もっとロシア語を勉強する必要があると思った。

カザフ人学生との交流ではロシア語、日本語、英語を使った。自分のロシア語は最低レベルなので、カザフ人学生が上級生で日本語がうまい場合は日本語、時には英語も使いながらコミュニケーションをとった。お互いの言語の総力量を足し合わせたときに、英語が一番優勢な言語になりやすかったので、英語で会話することは多々あった。カザフ人学生は英語を使いこなしていて、自分の英語力の低さをつくづく痛感させられた。CiCの授業の際もあまり聞き取ることができなかった。

それでも何とか3言語駆使して話すことができた。とても楽しかった。日本人数人とカザフ人学生数人で話すときは、お互いに自然に力を合わせて話し合うのでとても会話がスムーズにいった。話していてとても楽しいと思った瞬間だった。

カザフに来て気が付いたことがある、ロシア語が話せるようになれば、約1億4600万人と話すチャンスが生まれるということだ。(ロシア語話者人口 <https://japan.wipgroup.com/media/language-population> より)日本人よりも多い。今回の研修でカザフ人と話すとき、日本語を学んでいる学生であれが彼らの高い日本語力に頼ってしまうことが何回もあった。また、英語に頼ってしまったこともあった。もちろんどんな言語を使ったとしても、コミュニケーションをとることができれば何も問題はないが、ロシア語だけしか話すことができない人と話すためにはやはりロシア語が必要になる。今回の研修で、自分と違う文化、背景で育った人と話すことはとても楽しいことだと感じた。より多くの人と話すためにも、ロシア語、英語を今後も勉強していきたいと思った。

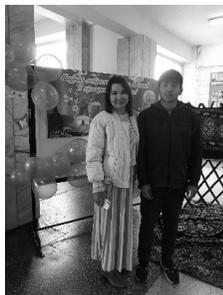
## 2. たくさんの人と出会ったことについて

カザフではほんとにたくさんの人と出会った。日本にいるだけでは出会えなかった人がいっぱいいた。ホストファミリーにカザフ人学生。今回の研修に参加してよかったことは何かと聞かれれば、迷いなく彼らと出会えたことと答える。彼らからカザフの話聞き、日本の話をした。日本で友達とするみたいに、くだらない話もたくさんした。こんなにも人と話すことが楽しいと感じたのは人生で初めてだった。カザフでは学年関係なく、みんなが同級生という感覚で話をする。だからこ

そ日本よりも気を遣わずに話すことができた。

ここで出会えたのはカザフ人学生だけではなく。準備学部に留学している韓国人、イラン人とも出会えた。彼らはロシア語が全然できない私たちにロシア語を教えてくれたり、待ちを案内してくれたりした。またロシア語を学ぶ日本人にもあった。筑波大学のプログラムの前に上智大学と東京外大の生徒向けのプログラムがあり、その2つの大学の学生とも交流できた。彼らは筑波とは違い、ロシア語を週5で学び、同じ1年生でも彼らはロシア語で会話できるレベルだった。カザフ人学生とロシア語で会話できることがとてもうらやましかった。彼らの中には一人で中央アジア諸国を周遊してしまう人もいた。とにかくすごい人たちだった。彼らにあえてとてもいい刺激になった。

カザフスタンで出会った人たち



ロシア語の先生との記念写真



カザフ人家族との会食



筑波大生たち、カザフ人学生たちとの記念写真



筑波大生とカザフ人学生の友人たち（本人が一番左）



メデウ スケートリンク場での記念写真

### 3. カザフスタンのいいところ

カザフスタンのいいところは人が他人に不干渉であるが、フレンドリーであるということ。街中で日本語を話していると、「ありがとう」などと話しかけられたり、どこから来たのと話しかけられたりした。カザフ人がお互いにお互いをまったく気にしていないためとても生きやすかった。自分は日本では他人の目を気にしてしまいがちだが、こっちは誰も見ていないのだと思うととても気が楽だった。バスの中、レストランで電話をしても誰も気にしない。そんな他人に不干渉なカザフスタンは自分にとってとても過ごしやすかった。かといって、カザフ人は冷たい人々というわけではなく。とても話すことが好きな人種だなと感じた。どんな時も話しているように感じた。実際にカザフ人と話すのはとても楽しかった。

またカザフ人は歌と踊りが好きなことにも気が付いた。イベントごとがあるごとに踊るため、みんな踊るのが好きと言っていた。日本人からしたら少しついていけない部分もあったが、とても楽しい文化だと思う。

カザフスタンの面白いところも発見した。いろいろなものが適当ということ。街中、建物の中にある階段は、それぞれの段で幅が違うし、バスの運転手は携帯を操作しながら、煙草を吸いながら運転していた。どんな職業の人でも仕事中に電話がかかってくれば出るし、仕事中に携帯をいじることはとても普通のこと。お店の店員は必要最低限のことしかやらないが、困っているといつも助けてくれる。適当だが、肩の力が抜けていてちょうど誰も無理しなくてよくて、気を使わなくていい。そんな楽な国だとも思う。

### 4. カザフ人に似ていたことについて

この研修で一番大変だったことは、どうしても日本人だと思われなかったこと。自分の顔がカザフ人に似すぎていて、ロシア語、カザフ語を話せないことをばれて初めて外国人だと思われるといったことが何回もあった。行く先々でカザフ人だといわれ、日本人だということとても驚かれた。何か話すまでカザフ人だと思われるため、街中でカザフ人だとおもわれて話しかけられるが何回かあった。日本人だけでレストランに行っても、カザフ人だと思われて店員は自分に話しかけてくるが、聞き取れないことの方が多かった。もっとロシア語を勉強して、外国人だとばれないくらい上達させたいと思った。

### 5. カザフスタンの美しいことについて

カザフスタンはとても美しい国だった。アルマティの中心部は空気が汚いが、研修中に行ったトルキスタンやチャリンキャニオン、クルサイなどはとても美しかった。国土は広いわりに人口は日本よりも少なく、少し都会から離れば一面草原が広がっていた。遠くの方の山脈もとてもきれいで、見ている飽きない景色だった。トルキスタンは街全体がとてもきれいだった。クルサイは透明度の高い湖があり、

日本では見たことのないような景色だった。チャリンキャニオンは2回言ったが、溪谷を日本で見たことはなく、とてもいい経験になった。カザフ人学生とも一緒に行き、道中たくさん話し、ゲームなどもした。とても楽しかった。



クルサイ



キウズ・ウユ



コジャ・アフメト・ヤサウイの霊廟



カザフスタンの大自然

この研修を通して新たな目標ができた。ロシア語を今よりずっと上達させて、またカザフスタンに戻ってくるのだ。宇宙開発に必要だと思って学び始めたロシア語だったが、これからは、カザフの人と話せるようになるために、もっと勉強したいと思った。